

## 実践的な教科指導力の育成を図る附属学校との連携協力

内 健 史 [鹿児島大学教育学系(教育実践総合センター)]

### Cooperation with the affiliated school to promote practical curriculum leadership

UCHI Takefumi

キーワード：学部と附属学校との連携、授業力、教育実習、評価の観点、教職実践演習

#### 1. はじめに

中央教育審議会の教員養成部会による答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(平成27年12月)では、教員養成に関する課題として養成段階においては「『教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修』を行う段階であることを認識する必要があること」「教員養成課程を有する大学・学部の附属学校を積極的に活用するなど、実践的指導力の基礎の育成に資するとともに教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせるための機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させること」等が必要であることが示された。

筆者は、教育実習を本学部附属学校で経験し、そこで学んだ国語科の授業設計や教科指導に関する考え方、知識・技能がその後の授業実践の基盤となった。また、教員として附属中学校に籍を置いた9年間に数多くの学生の教育実習に携わり、様々なテーマの実践研究に取り組んだことは、その後の教育行政における指導主事としての教員研修の企画・運営や研究授業等の指導助言を行う際の礎となっている。このことはあくまで個人的な体験ではあるが、前述したような教員養成における課題や社会的な養成があることを踏まえると、今後、附属学校に求められる役割は一層重要なものになると考える。

文部科学省「国立大学附属学校の新たな活用方策等に関する検討とりまとめ」(平成21年3月)においても、これからの附属学校には「国立大学の附属学校である特性を活かし、大学・学部の持つ人的資源を活用しつつ、公立学校で実施するものとは異なる先導的・実験的な取組を中長期的視点から実施し、関連する調査研究を推進する『拠点校』として、国の教育政策の推進に寄与すること」や「地域の教育界との連携協力の下に、地域の教育の『モデル校』として、地域の教員の資質・能力の向上、教育活動の一層の推進に寄与すること」が求められている。さらにこの連携の中では、大学・学部教員と附属学校教員が研究テーマを共有し、共同研究体制を組織するなど学内の人的・物的資源の効率的活用を図ることも考えられる、とされている。筆者は現在、教育学部における実践的指導力の育成・強化を図るために鹿児島県教育委員会から派遣されている実務家教員として実践的科目群を通して教員養成等に取り組んでいるが、その中で改めて学校現場で実際に授業実践について学ぶことの大切さや、附属学校等における教育実習の内容と質、ひいては附属中学校教員の指導の在り方が、学生のその後の教職実践にあたる影響は決して小さくないことを実感している。

## 2. 具体的な取組の内容

このような背景に加えて、筆者が主に担当している教育実践総合センターでは、重点的に取り組むべき役割として「附属学校（園）との連携」を掲げている。筆者が過去に在籍した附属中学校国語科では教員の入れ替わりがここ数年続いており、全員が在籍年数が4年以下となった。このことには附属学校における経験や研究の成果が地域の学校により還元されやすくなるという利点がある反面、長年にわたる研究の成果の蓄積や教材研究や指導の技術の伝達が十分にできなくなる可能性が生じるという短所もある。そこで、附属学校が教育学部生と県下の教員に対して、質の高い授業実践モデル及び教科研究の成果を今後も提供できるよう、筆者は附属中学校国語科と共同研究、協同的支援に取り組むこととした。その中で、現在行っている実践的科目群の取組についても、附属学校と共同で取り組むことによって学生が実践的指導力をさらに身に付け、附属学校の教員研修において授業実践の力量を高められるような工夫改善の余地が残されているように感じている。

具体的な取組としては、①研究公開へ向けた教科テーマに関する研究と公開授業づくり、②教育実習における学生指導のあり方の研究、③中学校におけるアクティブラーニングの実践及び学生へのモデル提示、等を考えたが、まずは附属中教員と学部学生がともに教科指導力を身に付け、高めていく重要な機会である教育実習の充実から取り組むこととした。

### 2.1. 教育実習における取組

先に触れた「国立大学附属学校の新たな活用方策等に関する検討とりまとめ」では、学部の教員が研究実践の一環として附属学校で授業を担当したり、高い実践性を備えた附属学校教員が大学・学部の授業を担当するなどして学部教員と附属学校教員が日常的に連携し、一体感が培われるような組織運営を図ることの重要性が述べられている。その中でも、教育実習については、大学・学部の計画に基づいて附属学校との連携の下、大学・学部の側が責任を持って実施に当たり、さらにその教育成果について検証することが望ましく、教育実習計画は附属学校を十分に活用したものとす、としている。筆者が在籍した当時から、教育実習（教育実地研究）の事前指導に附属学校の教員が携わっており、このことは十分重視されているところであるが、一方、教育実習を受け入れる側としては、3週間という限られた期間の教育実習（3年次：中学校）の中で、教科指導について、何を、どの程度できるようになることが求められているかについては必ずしも明確になっていなかった記憶がある。

#### (1) 教育実習前の取組

本学部においては、教育実習における目標として、①授業力を身に付ける、②子どもに関わる力を身に付ける、③学校における協同力を身に付ける、の三つを掲げている。この中でも特に教科指導に関わる「授業力」は、表に示すとおり「授業構成力」「授業展開力」「授業評価力」から構成されるとしている。

そこで、まずこれらの評価対象、項目、主な観点の具体的な内容を知り、教科の内容や特質を踏まえて具体的に考えてみるのが、必然的に教育実習における指導のねらいや内容・方法を具体化・

表 教育実習における「授業力」に関する評価の観点詳細表（中学校）

評価対象	評価の項目	項目の主な観点	
授業構想力	1 単元計画	教育過程における単元の目標や位置、内容について理解し、学習指導案を作成している	
	2 学習者の把握	教育内容に関する、生徒の学習の到達度や習熟度を把握している	
	3 目標の設定	授業を通じて検証可能な目標を、観点別に設定している	
	4 評価計画の作成	授業の目標や構成と整合性のある、観点別の評価計画を作成している	
	授業計画	5 教育内容の捉え	単元や本時の教育内容を深く理解している
		6 教材・資料	教育内容に適合する教材や資料を選択・加工し、提示している
		7 学習過程	教育内容の習得や活用を促す、発問や指示を組織している
		8 学習の方法・形態	教育内容を習得し活用させる適切な学習の方法や形態、活動を組織している
授業展開力	9 授業計画の実施・遂行	指導目標や学習計画に沿って、簡単な説明や指示・助言を行いながら授業を展開している	
	10 効果的な指導・支援	生徒一人ひとりや学習集団の個性や特性に応じた学習指導を展開し、効果的な指導や支援を行っている	
	11 学習展開や生徒の反応をふまえた対応	学習活動の展開や生徒の反応に即して、資料・教具を効果的に活用したり、発問や板書・環境構成を柔軟に組換えるなど適切に対応している	
授業評価力	12 授業の課題の捉えと改善への取組	指導計画や、指導の実際について省察し、次の指導に活かす工夫をしている	

平成 27 年度「教育実地研修の手引き」（鹿児島大学教育学部）から

焦点化することにつながると考え、この表をもとにそれらについて共通理解を図った。また、附属中学校国語科において指導のあり方を長年研究し、日常的に実践し、教育実習でも実習生に取り組みさせている課題解決学習や、国語科における言語活動のあり方について具体的に確認するために、筆者の在籍時の授業記録映像（3年：文学教材「初恋」）を共に視聴し、「学習課題の設定→共通基盤づくり→自己追究→相互練り上げ→自己解決→課題解決」という課題解決学習における授業設計の在り方、各学習過程における指導の工夫・留意点等について具体的な授業実践を基に意見交換を行った。

また、効率的・効果的な実習指導のあり方として、オムニバス形式で各教員がそれぞれの指導の長所や得意分野を担当して、板書・発問等の指導技術、説明文・文学的文章などに文種に応じた指導、「読むこと」以外の「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域に関する指導等について講義形式で指導することも提案した。本年度については、実習までの準備期間が短かったこともあり、実施にはいたらなかったが、具体的な提案と検討を今後も進めていきたい。

## (2) 教育実習中の取組

9月の3週間にわたる実習期間には、二つの評価授業を参観する機会を得た。附属中学校における実習指導に直接的にかかわることはなかったが、この評価授業を学部の研究者教員とともにみること、授業設計や展開、生徒とのかかわりといった視点以外にも、「読むこと」の指導において、文学的文章の本質に即した読解の在り方等について、これまでとは異なる視点を得たことは自身に

とつても新たな刺激となった。

また、そこで参加観察実習生（2年次）の授業参観や授業記録に取り組む姿を目の当たりにした。そのことで、学生自身が今後、大学において課題意識を持って教科の内容・特質に応じた授業構想や学習過程といった授業力の構成要素について学ぶようにするために、自身もその一部を担当している事前指導において授業記録の取り方、実習に臨む態度、授業参観の視点について具体的な指導を行うことの重要性を改めて実感した。そして、実習における附属中学校教員の指導内容と学生の受け止め方をとらえることをねらいに、評価授業後の授業研究または授業反省に関するレポート作成を指導するように依頼した。

### (3) 教育実習後の取組

これらの学生のレポートの記述内容を分析した結果、附属中学校の教員の指導事項としては、表中の「授業構想力」における「5教育内容の捉え」「6教材・資料」「7学習過程」「8学習の方法・形態」と、「授業展開力」における「9授業計画の実施・遂行」「10効果的な指導・支援」「11学習展開や生徒の反応をふまえた対応」に指導内容が集中していたことが分かった。このことから、初めて単元をとおした授業計画を作成し、40人の生徒を相手に複数回の授業を行う学生と、それを指導する教員にとっては50分の授業をどう構想し、展開するかということに力点を置かざるをえないということが推察される。さらに、指導内容としては、これらの全てを支える要素となる教材研究、机間指導に基づく指名計画の立て方、板書の仕方や構造化、教師の話し方、指導技術等に関する事、そして、これらを総合的に働かせて行う叙述に基づく読解指導や作者の表現意図を考えさせて多様な思考を促す発問、授業の山場づくりについて、教材や学生の指導の実際に即して具体的な指導や助言がなされていた。また、主に学習指導案の作成に関連する「1単元計画」については評価授業後に具体的に触れられることはあまりないようであったが、単元設定の理由から目標行動の分析、板書・発問計画にいたるまで細やかに作成された学習指導案からは、授業までの過程で丁寧な指導がなされたことがうかがえた。

その反面、「授業構想力」にかかわる「2学習者の把握」「3目標の設定」「4評価計画の作成」と、授業評価力に関する「12授業の課題の捉えと改善への取組」については、事後の指導の中で具体的に触れられることはなかったようである。筆者が在籍時の指導を振り返っても、限られた時間と授業回数の中では十分に指導が行き届かなかった事項ではあるが、確かな学力を育む教科指導力を身に付けるためには、指導と評価の一体化を図る力と評価規準に基づき授業を構想し、板書や発問を構造的に組み立てる力は必須であり、今後、その指導の内容・方法を教育実習期間中だけではなく、実習前後の大学での指導や学習の在り方も含めて、検討していく必要があると考える。

### 3. 教職実践演習（4年次）における取組

教職実践演習は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡

## 内 健史：実践的な教科指導力の育成を図る附属学校との連携協力

の集大成」として位置付けられるものである。4年次における本科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

鹿児島県教育委員会から人事交流で実務家教員として派遣されている4人で担当しているのが「教職実践演習Eコース」であり、主担当の教員の企画運営のもと、附属学校教員を「支援教員」、教育学部の関係教員を「指導教員」とし、役割分担をしながら次の内容に取り組んでいる。

- ① 教師として必要な実践的資質能力が形成されているかを把握すると同時に、将来教師となる上での実践的な力量形成に向けた「研究テーマ」を設定する。(学部)
- ② 附属学校での教育支援活動等を通して、課題の解決に向けた取組を進め、その成果を記録するとともに、成果報告会で発表を行う。(附属学校→学部)
- ③ 過去受講した講義や文献(本)を活用したり卒論と関連づけたり、指導教員、支援教員の指導助言等を通して課題やテーマの解決に向けた取組を進めていく。

また、本演習中における学生の具体的な活動内容は、以下の通りである。

- ① 自己課題をもとにした研究テーマを設定する。(テーマについては、授業に関すること・学級経営等に関すること・学習者理解に関すること、の三つの視点の中から一つに絞る。)
- ② 全5回の支援活動の各回終了後に「教育支援活動振り返りシート」ファイルを記入し、大学担当教員へ提出すると同時に、面談をする。
- ③ 「指導教員」や「支援教員」との面談や他学生とのグループ協議を適宜行う。
- ④ 成果報告会で支援活動及び課題追究の成果を発表し合い、指導教員からの指導を受ける。

本年度は国語科の学生3人が本演習を受講(10月中旬～11月下旬)したこともあり、附属学校と連携して行うという本科目の特質上、本稿のテーマを具体化するよい機会となった。大学におけるオリエンテーションとテーマ設定後の附属中学校における支援教員による指導及び教育支援活動は、「①代表支援教員の授業参観並びに授業研究→②各学生の担当支援教員の授業参観及び支援活動→③学習指導案の作成・検討→④授業実践及び授業研究」の流れで行った。また、各活動の間に大学において指導教員による面接や他学生との協議を実施し、振り返りシートに基づく省察や課題の追究、解決を図った。

これらの活動をとおして学生は、3年次の教育実習においては十分に追究できなかった課題である「生徒全員が授業に参加するための働きかけ」や「授業の山場のつくり方」、「生徒が主体的に学べる教師の発問・指示・説明・KR反応」について具体的に課題追究を行い、現場での実践のヒントを得ていた。さらに、支援教員と指導教員と一緒に授業研究を行い、それぞれの視点からの指摘や指導助言がなされることで、学生のみならず、教員間にとっても、日常とは異なる多様な視点から確かな教科指導力を学生に身に付けるための指導の在り方を見つめ直すことができた。

## 4. 終わりに

変化の激しいこれからの時代を生きていく子供たちに、知識や技能を修得させるだけでなく、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力及び主体的に学習に取り組む態度を育むためには、子どもの教育に携わる教員自身が教職生活全体を通じて不断の努力で指導力を身に付けていかねばならない。そのためにも、大学における養成段階では、「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行わねばならないということを、今回の取組や実践の科目群の指導の中で改めて認識することであった。

また、教育実習や教職実践演習で学生が取り組んだ課題解決学習は、課題の発見・解決に向けた生徒の主体的・協働的な学びと教師の深い教材研究と目標分析に基づく問いとが重要になる。このような点で、アクティブ・ラーニングの視点に立った指導・学習環境の設計学習を展開する上で必要な指導力を身に付けることにつながる可能性がある授業スタイルであると考え。また、このような学習を意義あるものとして成立させるためには、授業力のみならず、子どもに関わる力や学校における協働力を身に付けていくことも欠かせない。そのためにも、学校現場における教職体験の質と量が問われるところである。教育学部における学校現場での実習等をより効果的に行い、確かな実践力を育てるためにも、大学教員と附属学校教員が連携協力し、実習の目標を明確にして習得を目指す技能や実践のレベルを具体化していくことや、高い教科指導力を有する教師が具体的な指導の見本を示せること、そして、実習前後の連続的・形成的なフィードバックと指導を受ける機会を数多くつくることや実習校の教室での活動を大学の理論的な学びに結びつける機会を多く持つこと等がより重要になると考える。

今後は、附属学校は地域のモデル校や大学の教育研究への協力といった役割だけでなく、平成29年度から新設される教職大学院等とも連携し、県教育委員会との人事交流を活用して、その特色を生かしながら教員研修学校としての役割も拡大強化すること求められるであろう。今後も附属学校における教職経験を有しその実情を知る者として、また、実務家教員として大学における教員養成に携わるものとして、そのどちらにも貢献できるよう附属中学校国語科との共同研究、協同的支援に取り組んでいきたい。

最後になったが、今回共に学生の教育に取り組み、労を惜しまずその内容の充実に努めていただいた附属中学校国語科の先生方に心より感謝申し上げたい。

#### 参考文献

中央教育審議会教員養成部会答申（平成27年12月）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」

文部科学省（平成21年3月）「国立大学附属学校の新たな活用方策等に関する検討とりまとめ」